

12. 七日目・Linlithgow ～ Falkirk・再びホイール

昨日は予定通り昼過ぎにリンリスゴウに着き、ビジター用浮き栈橋に係留。 船で昼食をすませ、すぐ近くの駅から列車でまたエディンバラに行ってきました。

リンリスゴウのビジター・バース（泊地）は、鉄道駅からごく近い崖の上にあり、浮き栈橋を繋いであるトウパスから覗くとプラットホームがこんな風に見下ろせる位置です。



残念ながらこの斜面には道路がないので、駅へ行くにはぐるっと迂回しなくてはなりませんが、それでも駅舎まで歩く距離は100メートル位でしょう。

今回のクルーズで泊まった所は概ね便利な所でしたが、ここも文句なし。 しかも、電車の数は日中の一番少ない時間帯でも1時間に4本もあるし、エディンバラ中央駅ウェイヴァリーまで乗り換えなしで、所要時間も25分前後と申し分ありません。 日本の不動産広告なら、通勤至便、と言う字が躍りそうなロケーションです。

こんな所ですから、エディンバラへ行くにはラソーより遠くなったにも関わらず、移動はもっと簡単になって、午後の時間一杯エディンバラでの最後の街歩きを存分に楽しんで

ました。土曜の午後だったし、シーズン最終節となったスコッティッシュ・プレミア・リーグの試合があったので、夕方からは目抜き通りに人が溢れてきました。

そろそろ帰ろうかという時、私達はプリンシズ・ストリートを中央駅に向かって歩こうとしていたんですが、なんと歩道上の人人人は殆ど私達とは反対方向に向かっていて、その流れに逆って歩くのはとてもむずかしい状態でした。

中央駅からリンリスゴウ方向に向かう路線の一つ目の駅はヘイマーケット Haymarket というんですが、その少し先にスタジアムがあって、町中の人があるところに向けて集まって行くんじゃないか、と思うほどの人の流れでした。

初めは逆らって中央駅を目指したんですが、とうとう諦めて180度方向転換、一駅先のヘイマーケットから乗ることにしました。人の流れに乗ってしまえば流れの速さにあわせるだけ、ぐっと楽になります。しかし、スタジアムが近くなるにつれ、歩道上の人は益々増え、そこそこにあるパブは超満員、グラス片手の半酔っ払いが路上にまで溢れてきているので、歩道の流れも滞り勝ちになってきました。

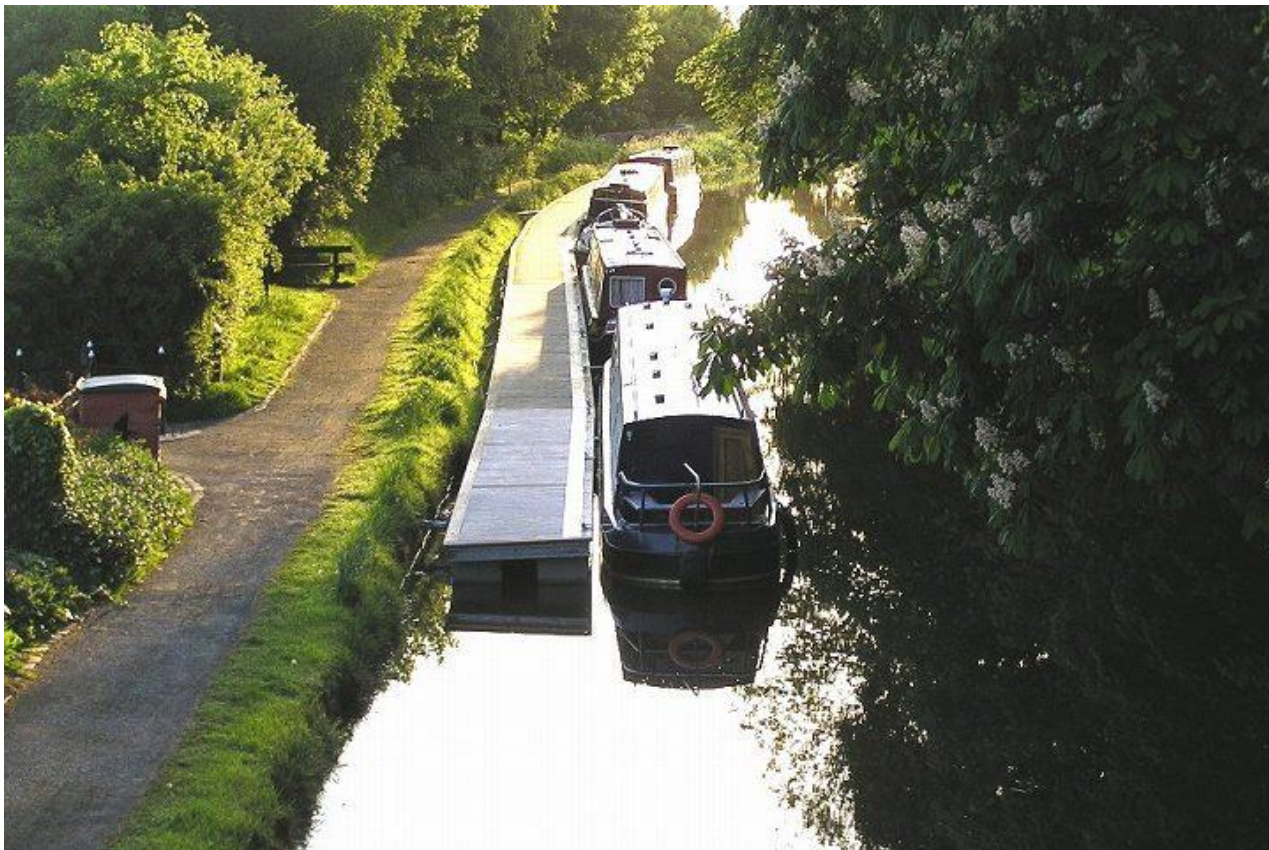
入場券を持っていない人は、せめてパブの大画面テレビを大勢のサポーター同士で囲み、感動と興奮を共有しようというのでしょうか。しかも、少しでもスタジアムに近いパブで、という心理が働くようです。それにしても、このサッカー人気は只事じゃないなという感じです。これだもの、一つ間違えばフーリガン騒ぎになっても何の不思議もありません。

とんだ騒ぎに巻き込まれましたが、どうにか駅にたどり着き、乗った列車はガラ空き。上りも下りも乗客の殆どはこの駅で降りちゃったんですね。大都市にも関わらず普段は比較的静かな印象だったこの町もこの日ばかりは沸き立っていました。

私達もイングランド・プレミア・リーグやリーガ・エスパニョラの試合はテレビで放映される全試合を見て楽しんでいます、専らテレビ観戦のみです。こういうサポーターたちの群集を目の当たりにすると、興奮が興奮を呼びときにはとんでもない騒動になることが容易に想像できます。

長歩きの末、ガラ空きの列車のシートに座って、ヤレヤレ。やっぱり私達にはウチで冷えたビールでも呑みながらのテレビ観戦が一番。入場料も足代も無用だし・・・。

一夜明けたリンリスゴウのビジター用浮き栈橋。Little Weaver は一番向こうの端です。



ここは、駅は近いし、スーパーへも徒歩10分かからない便利地。深い木立に囲まれているので線路が近くても列車の音は全く聞こえません。静粛性と利便性を兼ね備えた快適なバース。このバースは往路給水をしたベイスンからエディンバラに向かって橋を一つ越えたところです。写真はその橋の上から撮ったもの。

ベイスンにもビジター・バースが数隻分ありますが、そばに道路があつて静かさでは劣ります。だから、そっちには1隻も泊まっていませんでしたが、こっちはこの通り、4隻のボートが同居でした。これまでにない盛況です。

4隻のうち私達を含めた2隻は西向きファルカーク方面、あとの2隻は東向きでした。西向きは私達同様月曜スタートで、今日中にファルカークに着こうとしている筈。東向きは昨日の土曜スタートで、これからエディンバラを目指すのでしよう。

*



朝食前、いつものとおりトウパス散歩。これは前の写真の反対側からで、**little Weaver** は一番手前です。この辺り、運河の両側は住宅地ですが、運河沿いには木立が続いていて家並みは所々木が途切れた所でしか見えません。



トウパスを歩いていると木立の切れ目から、あの悲劇の女王メアリー・ステュワートの生

誕の地、リンリスゴウ・パレスが見え隠れしていました。画面中央の下の方に白っぽい街灯のような物が見えるでしょう？ これはさっきのリンリスゴウ駅のプラットフォームのライトです。

*

この町は往路すでに散歩しつくしているのので長居は無用、朝食後直ちに出発です。リンリスゴウを出るとじきに風が強くなってきました。どうもファルカーク・ホイールの近くは風の通り道らしい。この分ではホイールに乗る時また風に吹かれて苦勞するかも。



走り始めてすぐ、こんな所がありました。この浮き棧橋は右手に見えるクリーム色の壁と赤い屋根の建物、これはパブですが、その客用に設けられたバースです。多分パブのオーナーが自費で設置したものだと思います。パブの客なら食事中の係留は自由ですが、オーバーナイトが可能かどうかはオーナーとの交渉次第、なんでしょう。

*

しかし、手前の土手になら、例のペグを打ち込んで何時でも誰でも係留OKです。勿論オーバーナイトでも……。パブで呑み過ぎても酔っ払い操船はしないですむわけ。酔っ払っていないなくても運河では夜間の航行は原則禁止です。

ここでは運河沿いのパブ自体が少ないので、こういうバースも余り見かけませんでした
が、イングランド各地の運河では良く見かける光景です。 もっと立派な石造りのパーマ
ネント・バースもありますし、パブやレストランの庭先がそのままバースになっている所
もよくあります。

今日の行程はリンリスゴウからこのクルーズ出発点のボート屋棧橋までの12マイル。
けれども今日はファルカーク・ホイールに乗っかるし、その手前に二段ロック、ホイール
の先にも一段ロック、更にその先にはスウィング・ブリッジと盛り沢山。 これらに加え
て二つのトンネルも有ります。 だから、今日の12マイルはこの運河の中でも一番中身
の濃い行程と言えます。

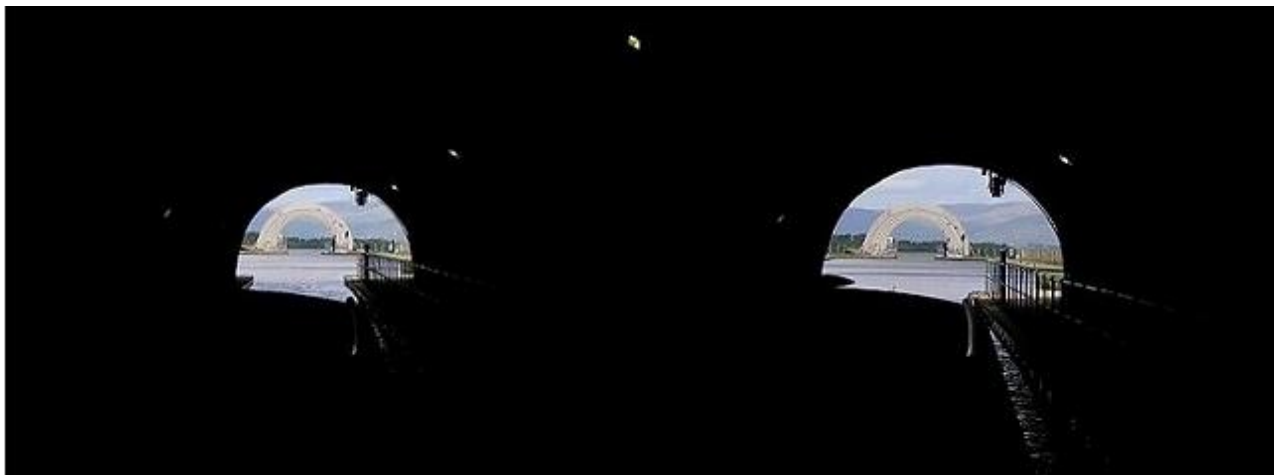
まあ、それでも正味の走行は4時間、二段ロック、ホイール、一段ロック、ブリッジ、そ
して夫々にあるかもしれない待ち時間、全部あわせても5時間半か6時間見ればいいでし
ょう。

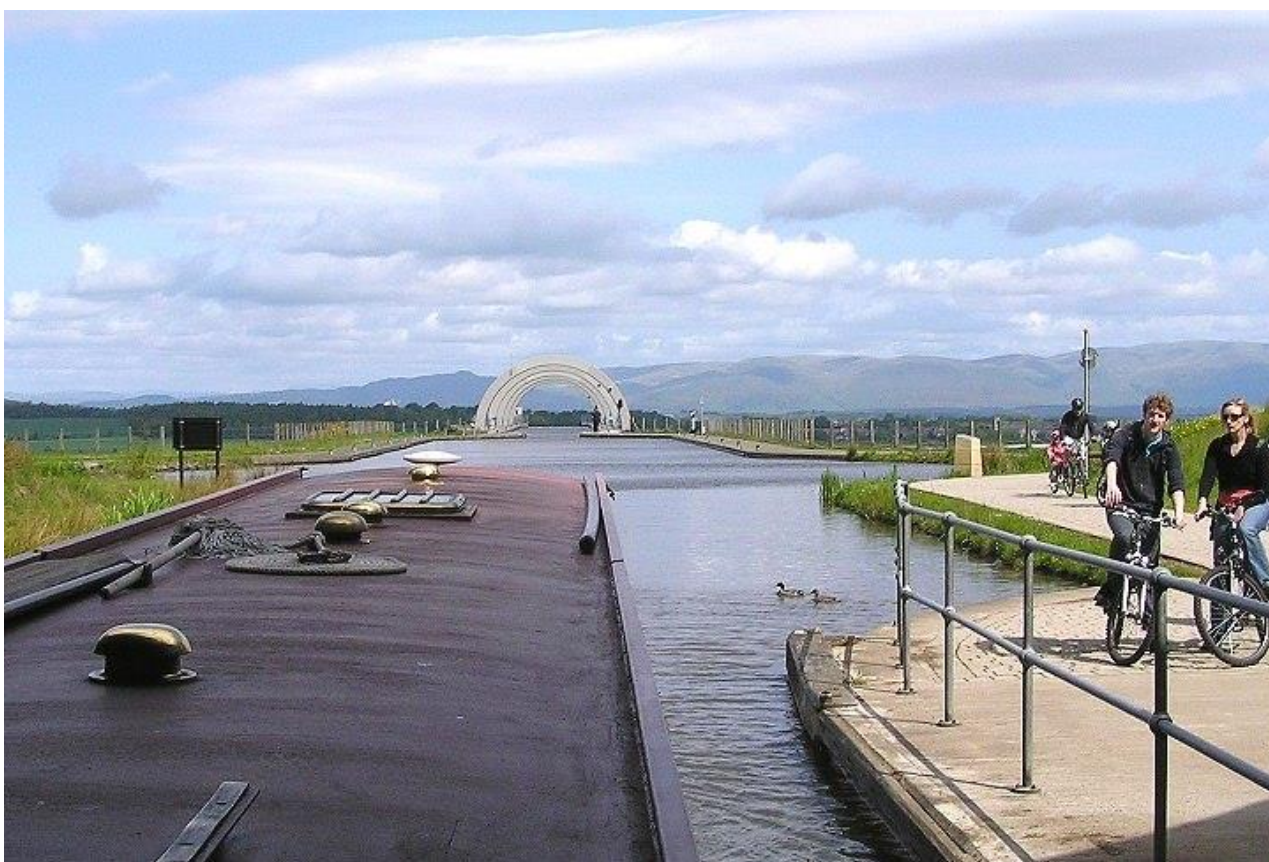
ファルカーク・ホイールの約一時間前、例の「泣き笑い橋」の辺りでホイール・トップ・
ロックス（二段ロック）の到着時間を運河事務所宛てに電話連絡します。

そうするとロックへ着く頃には、運河職員がホイールから車で来てくれてロックの扉やバル
ブの操作をしてくれます。 そして、ロックを通過し終わると、ホイールの通過予定時
間も彼等から事務所に伝えられるのです。

*

最初の二段ロック(Falkirk Wheel Top Locks)を超えると、すぐあのローマ遺跡の尾根を
くぐるトンネルに入ります。 クルーズ二日目に、アルキメデスという名前の遊覧船がト
ンネルに入ってゆく写真があったの憶えてますか？ あのトンネルです。 トンネルの中
を進むにつれてホイール上部のアクエダクトのアーチがこんな風に見えてきました。





そして、トンネルを抜けると一気に視界が開けます。サイクリングのお二人さんは私達がトンネルから出てくるのをずっと見守っていました。鴨のカップルも・・・。

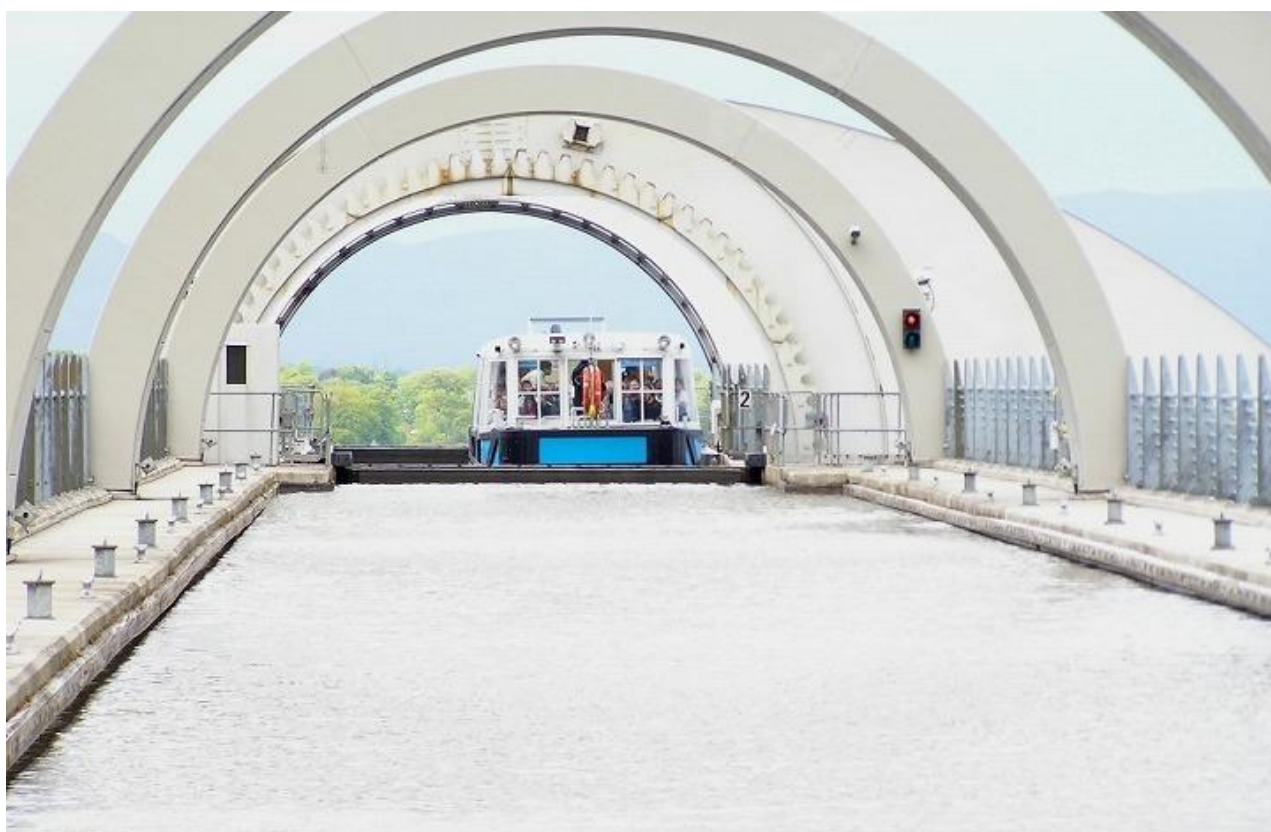
アクエダクト入口のアーチの下、水路の右側に黒い人影が見えるでしょう、私達の世話を
する運河職員です。水路の行く手、アーチの先には何にもありません。私達は一週間前
ここを上ってきたんだからどうなっているか百も承知ですが、もしボートの出発点
がエディンバラで、このホイールの仕掛けを何も知らずに始めてこういう光景を見たとし
たら、ぎょっとするかも知れませんね。あの先はどうなってんだろ・・・と。

ホイールに近付くほどその感じは深まります。



近づくにつれて時々左からの横風が強くなるのが感じられます。

アクエダクトの入口に近付くと、待機していた運河職員から風上側(左側)に船を繋いで待つように指示がありました。丁度このとき遊覧船が下から上がってきつつあったんです。その遊覧船のために水路の風下、写真の右を空けるというんです。



えっ、逆じゃないの？と思いました、だって、それだと左舷対左舷じゃあないですからね。でもここは運河職員のコントロール下なんだから、言うとおりにするしかありません。横風の強い時に風上の岩壁につけるのは楽じゃないんです。

案の定これから先は大忙しでした。

Nが船首で上の写真を撮っている間も後ろでは既に奮闘が始まっていたんです。この後どうにか船首だけは風上に着けることは出来たんですが、私がロープを持って岩壁に飛び降りた後、風に押されるボートと綱引きになり船尾は殆ど風下の岩壁まで流されそうになる始末。

私達がモタモタしている間に、上がってきた遊覧船がもうゴンドラから出ようとしていました。運河職員は風下側の岩壁に居たので、彼も助けてくれたくても手の出しようがありません。私達の悪戦苦闘を見るに見かねた遊覧船の船長からは、イイヨ、イイヨ、そのまま風下の岩壁に着けなさい、と合図してくれたんですが、私達自身は風上の岩壁に残ってしまってるんだから、それも困ったもんです。

と、丁度その時、正に絶妙のタイミングで、それまでの強い横風がふっと弱くなりました。ソレッと二人共渾身の力でロープを引っ張ってボートを風上に戻し、ようやく風上の岩壁にピタッと寄せることが出来ました。そして、遊覧船は私達の風下をゆっくり通過していったのです。

船長は私達の労をねぎらい敬礼して通って行ったし、客室の中の遊覧客も手を振ったり拍手したりしながら通過してゆきました。やれやれ、まいったマイッタ。

何故、運河職員は私たちに風上に着けると言ったのでしょうか？それは観光船が既にゴンドラの中で風下に舫っていたから、そりゃその方が楽だからね。そして、私達がアクエダクトの風上側に着けることにそれほどの苦労をするとは思わなかったからでしょうね。

非力なハポネス!!

遊覧船はバウ・スラスターもスターン・スラスターも装備しているんだから、ゴンドラの風下側からアクエダクトの風上側に出てくることもそんなに難しくはなかった筈。だから、左舷対左舷にしておきゃなんてことなかったのに。まあ、運河職員もこの瞬間、横風がそんなに強くなることは予想していなかったのでしょう。

スラスターというの憶えてますか？ 横向きのプロペラですね。そしてバウは船首、スターンは船尾。この装備があると操船性能は飛躍的に向上し、殆ど自由自在に操れます。例えば船を真横に寄せることも可能だし、舵もエンジンも一切使わずにその場回頭

することも可能です。

とにかく、ここはビルの屋上みたいなもんで吹きっさらしだから、地上では大した風でなくても油断は出来ません。クルーズの最後になってエライ苦労させられてしまいました。

＊

ホイールの下りには相客はなかったのでゴンドラ内では風下側へ着けることができ、セーフ、これなら楽なもんです。ホイールでの降下は何の問題もなく、下のベイスンについてそのまま最後の一段ロックとスウィング・ブリッジも待ち時間なしでスムーズに通過、出発点の浮き桟橋に無事係留できました。これでボートでの走行、事実上のクルーズは完了したわけです。

＊

ボートを舫って、ゴクローサン・ランチ・ビールもすませ、改めてファルカーク・ホイールの威容をもう一度見に行きました。今度はホイールの裏側からのショットをいくつか・・・。



ホイールの裏側へ向かう遊歩道を登り始めたとき、一隻のナローボートが下のロックから出てきてゴンドラへ入るところでした。

ロック水面はとっくにベイスンの水面と一致していてロック・ゲイトも開いていたんですが、手前の遊覧船がゴンドラから出て着岸するのをロック内で待っていたんですね。

土・日・祝日などの観光客の多い日にクルーズをスタートすると、このようにショッパナからあちこちで少しずつ引っかかる可能性があります。

どうやらこのボートは三組の夫婦が相乗りのようです。これだけクルーがいれば少々横風が吹いてボートと引張りっこになっても負けはしないでしょう。

皆さん重量級のようなだし・・・。



ボートは何事もなくゴンドラに首を突っ込めたようです。ゴンドラの風下側だし、ここでは風も上よりは弱いからこれなら問題なし。一人あたたま百キロ近くありそうな人たちだから、その重量増加分横風の影響もすこし小さくなるかな？ 私たちとは半トンも違うんだから・・・。

ロックの向うに見える水面は、フォース・アンド・クライド・チャンネルです。私達もさっきこのロックを出てから右手に曲がってスウィング・ブリッジを通ったのです。



ホイールの上はこんな高さの吹きっさらしなんだから、横風に吹かれたらたまりません。ファルカーク・ホイールの周りには、アクエダクトの先のトンネルと更にもっと先の二段ロックまで、全部をぐるっと回れるように奇麗な遊歩道が整備されていました。世界に一つしかないこの仕掛けを四方八方からとくと見てもらおうと言うのでしょう。

*



上の二枚は遊覧船が上がってくる所、下は降りて行くところです。



当たり前ですが、上がってくる観光船はこちら向き、降りて行くのは向う向きです。ゴンドラを常に水平に保つための歯車機構が良く分かりますね。複雑な構造ではないけれど実に良く考えられています。

この日は日曜とあってホイール見物の観光客も多く、遊覧船も大忙しの様子でした。こういう日は、この遊覧船の行動範囲であるホイール・ベイスンから二段ロックまでの間、ボートの移動には多少の待ち時間が生じるのは避けられません。だから下の写真のようにトンネルとアクエダクトの間にも待機のための小さなベイスンを用意してあるのです。



上の写真はさっきくぐったトンネルの入り口の真上からの光景。下は同じ位置でのズームング。やっぱり不思議な光景ですねー。



敷石の遊歩道はトウパスと同じように運河に沿ってトンネルの中へ入り、そのままホイール・トップ・ロックスまで続いています。運河のこの部分は2001年になって建設されたのですから、トウパス(曳き馬道)であるはずはなく、これはあくまで遊歩道と言うべきでしょう。



私達はトンネルも2段ロックも既に知っているので、アクエダクトの東（この写真の右手）から上がってきて、トンネルには入らず、トンネル入口の上を通過して、アクエダクトの西（左手）へ下って行きました。

最後の写真はアクエダクトの西側から見たホイール・ベイスン。左手に横向きの青いナロー・ボートが舳ついています。私達がクルーズ第一夜を過ごしたのもこの棧橋でした。手前に金網のフェンスが見えますね、ベイスンは夜間立ち入り禁止なので回りはすべてフェンスで囲まれています。ベイスン内で夜を過ごせるのはベイスン内のボートに乗っているビジターだけなのです。

手前の黄色の小さな花はイギリスの芝生ではよく見るバターカップという花です。今は五月下旬、冬が明けるのが遅いスコットランドもようやく「春たけなわ」なんですよ。明日は、09:00までにボートを返さなくてはなりません。今夜はファルカークの町で打ち上げ!! この巡航記も次回で完結です。

ではまた来週。 R & N

* * * * *